

論文の和文要旨

論文題目 La particella *pa* nelle varietà del ladino dolomitico con particolare attenzione al fassano (ドロミテ・ラディン語とくにファッサ方言における小辞 *pa*)

氏名 土肥 篤

要旨

本論文はドロミテ・ラディン語に現れる小辞 *pa* (方言により *po*) を対象とし、その性質を統語・意味・語用論の観点から明らかにすることをめざすものである。またその際、以下に述べる理由から、五つある方言のうちトレント県で話されるファッサ方言に特に注目する。この小辞は北イタリアで広く用いられるが、その用法は特に疑問文において、方言によって大きく異なる。ドロミテ・ラディン語においても、この語が持つ機能は(1)のような話し手の心的態度を表す要素 (アンペッツォ方言) から(2)のような疑問文における義務的マーカー (ガルデーナ方言) まで多岐に渡る。

(1) Ma cé vɔʃ=to *po*?
But what want-you PRT
「いったいどうして欲しいって言うんだ？」 (ALD-II 1024: *Ma cosa vuoi ...?*)

(2) Can compr=i *pa* n liber?
When buy-they PRT a book
「彼らはいつ本を買う？」 (Hack 2014: 55)

ファッサ方言では小辞が疑問文において頻繁に使われるにも関わらず、義務的ではなく、さらに現れた場合に何かしらのニュアンスを付け加えることもないというとりわけ特殊な用法が見られる。すなわち、(3)において、小辞 *pa* の有無は文の文法性にも解釈にも影響しない。

- (3) Che as=te (pa) fat?
What have-you PRT done
「君は何をした？」(Hack 2011: 67)

そこで本論文ではファッサ方言における小辞 *pa* について、比較の視点から研究した。比較の対象としてはドロミテ・ラディン語を含む北イタリア諸方言における小辞の用法だけでなく、主にイタリア語・ドイツ語における心態詞と呼ばれる要素を扱った。これは *pa* が多くの言語で心態詞として使われること、およびファッサ方言のものを含む特殊な用法が文法化と深く関わっており、ドロミテ・ラディン語の全ての方言において心態詞として用いられていた時期が存在することによる。

本論文は以下の五章および付録からなる。

1. Le particelle modali (心態詞)

特に心態詞の研究が進んでいるドイツ語における成果をもとに、その一般的な特徴を扱った。これらの特徴はさらにイタリア語における心態詞に応用し、以降の章における分析の基礎を提示した。とくに心態詞の統語的特徴について、そのモダリティに関わる機能と文の統語構造が持つ関わりを捉えるため、Rizzi (1997) による、いわゆる分離 CP 仮説を理論的枠組みとして採用した。

2. Le particelle modali in alcune varietà alpine (アルプス地域で話される諸言語における心態詞)

前章の心態詞一般に関する研究をイタリアで話される方言・地域語に現れる語に適用して分析した。具体的にはヴェネト州およびトレンティーノ＝アルト・アディジェ州のうちトレント県で話されるヴェネト語を対象にし、イタリア語にみられる心態詞の地域による差異と各方言に特有の心態詞を扱った。さらに、南ドイツのバイエルン方言に現れる心態詞 *denn* とその文法化についても対象とした。

この章では談話辞を文中で現れる位置によって三種類、すなわち文頭・文中・文末に分けた。特に、分離 CP の枠組みにおいて、文頭位置と文中位置の境界が「発話力」(Force) と呼ばれて文タイプおよび発語内行為に関わる情報を担うとされる位置とそれより上の間にあることを示した上で、文中位置に現れる心態詞が成立する文法化のプロセスが二つの種類に分けられるのに対し、文頭位置で起こり得るのは比較的単純なも

の一種に限られることを指摘した。

3. Le particelle modali nel ladino dolomitico (ドロミテ・ラディン語における心態詞)

ドロミテ・ラディン語における *pa* およびその他の心態詞を扱った。具体的には、第1章および第2章において得られた結果をドロミテ・ラディンに適用した。この章においては特に、*pa* の疑問文におけるバラエティに富む用法を各方言について詳細に記述した。先行研究 (Hack 2011, 2014) が指摘する通り、これらの用法は *pa* が時を表す副詞から心態詞へと変化し、さらに疑問文のマーカ―へと変化する文法化プロセスの存在を示唆している。

また、*pa* が心態詞としてではなく文法上の機能を持って現れる文は全て定動詞が文の中で高い位置へ移動する文であるという観察から、文法化の結果として *pa* が第2章で特定した文中のうち最も高い位置に直接現れる要素へと変化していることを指摘した。さらに、いわゆる V2 語順を持つガルデーナ方言およびバディーア方言でのみ同様の変化が平叙文でも起こっていることから、この特徴が最初は疑問文において現れたのち、同じく定動詞が移動する平叙文および命令文にも広がった可能性があることを示した。

4. La grammaticalizzazione della particella *pa* nel ladino dolomitico (ドロミテ・ラディン語における小辞 *pa* の文法化)

前章で記述した現代における *pa* の用法をもとに、通時的な観点からその変化を扱った。先行研究によって提示された文法化モデルを検証するため、オンライン通時コーパス Corpus dl Ladin Leterar を用い、ガルデーナ方言・バディーア方言・ファッサ方言について、1800年から1999年までの全ての疑問文を収集し、*pa* の使用頻度および用いられるコンテキストを比較した。

分析の結果、先行研究によるモデルは小辞が最も文法的な用法を持つガルデーナ方言においては有効性がはっきりと認められる一方で、他の方言については一部しか当てはまらないことを指摘した。これは、先行研究による分析がドロミテ・ラディン語における方言全てについて統一的な文法化を想定しているのに対し、各方言においてその方言に特有のファクターを考慮した異なるプロセスを考える必要があることを示している。

5. La particella *pa* nel ladino fassano (ファッサ方言における小辞 *pa*)

この最終章においてはファッサ方言における *pa* の用法を下位方言のレベルまで掘り下げて詳細に記述し、分析した。上述の通り、この方言は *pa* が心態詞のモダリティに関わる意味機能をすでに失っているにも関わらず文法マーカ―になっていない、いわば過渡期にあるとされている。それにも関わらず、前章における通時データの調査では、

少なくとも 18 世紀から現在に至るまでファッサ方言における pa の用法には変化がないことがわかった。そこでこの現象をよりよく理解するため、二度の現地調査を各下位方言について実施してデータを収集した。

見かけ上の意味を持たず、義務的でもない pa の用法は Benincà & Damonte (2009) の人称代名詞に関する研究における仮説を援用し、疑問文マーカである pa が音声を持って実現しない要素と自由に交代する現象として解釈した。さらに、ファッサ方言における疑問文の作り方には小辞 pa の文法化のほかに 1980 年頃に起こった疑問文の統語構造の変化、および近年におけるファッサ方言の標準化を前提にした学校でのラディン語教育が影響を与えていることを指摘した。

これらの五つの章に加え、付録として現地調査に用いた質問票、およびドロミテ・ラディン語のデータのある言語地図 (Sprach- und Sachatlas Italiens und der Südschweiz, Atlante sintattico d'Italia, Atlante linguistico del ladino dolomitico e dialetti limitrofi) から全ての疑問文を抜き出したデータを付録として収録した。

本論文では、時間を表す副詞であった小辞 pa が語彙的な意味を失って語用論上の意味を獲得することで心態詞となり、さらにその語用論上の意味を失って純粋に文法的な機能を得て文法マーカになる文法化の過程を、ドロミテ・ラディンのうちガルデーナ方言、バディーア方言、ファッサ方言について記述した。特にファッサ方言については、下位方言についても詳細な検討を行った。この文法化はある要素が文の統語構造において最上位に位置する領域との関わり方を変化させていく過程であると言える。これは、この領域 (Force) が文タイプおよび発語内行為に関わる情報を担う場所であることによる。したがって、本論文における統語論の観点による分析は文の左縁部の研究の中に位置付けられ、談話が統語構造の中にどのように反映されるかについての議論に新たなデータでもって貢献するものである。

一方で、ドロミテ・ラディン語についての研究としてみたとき、pa という要素が各方言だけでなく各下位方言において異なる用法と歴史を持っていることがわかった。特にファッサの谷の内部における疑問文のバリエーションは、この言語を特徴づける歴史的な規範化の乏しさと近年における標準化の試みの対立がはっきりとみて取れるケース・スタディである。同時に、少数言語であり、極めて一様な特徴を持つマイクロ・バリエーションとしてのドロミテ・ラディン語において特異なほどバラエティに富む小辞 pa の研究は、この言語における研究が持つことのできる深みを示していると言える。